

「自分の道を進む」(ルカによる福音書一三章三一―三五節)

1 「ここを立ち去るように」

今日の箇所も、エルサレムに向かうイエスの道行きの一コマです。ここはしかし、何か特別なことが起こったというより、イエスのこころの思い、それが強く伝わってくる所です。

何度か申し上げていますが、ガリラヤを去ってエルサレムに向かう、その道順ははっきりしているわけではありません。聖書自身が、ほとんど触れていません。ただ一般には、イエスは、ヨルダン川の東部(聖書地図、ヨルダンの右側)、ペレア地方を通って行ったと考えられています。

ちょうどそのとき、ファリサイ派の人びとが何人か近寄って来て、イエスに言った。「ここを立ち去ってください。ヘロデがあなたを殺そうとしています」。イエスは言われた。「行って、あの狐に、『今日も明日も、悪霊を追い出し、病気をいやし、三日目にすべてを終える』とわたしが言つたと伝えなさい。だが、わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない。預言者がエルサレム以外の所で死ぬことは、ありえないからだ」(三一―三三節)。

「ちょうどそのとき」と、はじめにあるので、イエスが、前の箇所で、「狭い戸口から入るように努めよ」と言って教えを終えたときです。ファリサイ派の人々の何人かが来たというのです。

ファリサイ派の人たちが来たというと、また激しいやりとりが、イエスとのあいだではじまるのかと身構えてしましますが、今度は、そうはなりませんでした。「ここを立ち去ってください。ヘロデがあなたを殺そうとしています」と、むしろ善意のアドバイスのような言葉をイエスにかけています。

ヘロデというのは、ご承知のように、イエスの時代、ガリラヤと、いまイエスがいると思われるペレアを、長く治めていた領主です(在位、紀元前四〇三九年)。ヘロデ大王の息子の一人で、残忍で聞こえ、イエスもここで、「あの狐」と呼んでいるような人物でした。

このヘロデについて、私どももすでに、自らの姦淫を責められたため、旧約最後の預言者、バプテスマのヨハネをとらえ、殺害したのを知っています(三、九章)。ヨハネ亡き後、イエスの評判を耳にして、「イエスに会ってみたい」(九・九)ともらしたこともありましたが、ただファリサイ派の人がこの箇所で告げたような「殺そうとしている」という直接の証拠はありません。しかし彼が、イエスについて、バプテスマのヨハネの生き返りだとか、昔の預言者が生き返ったのだというような世間の噂を耳にして、あのヨハネと同じだと考え、イエスをとらえ、殺そうとしたとしても、少しもおかしくありません。

その領主へヘロデが命を狙っていますよ」というファリサイ派の人の言葉、これは

どう受けとったらよいのでしょうか。

一つは、いい意味では受けとれない、というのがあります。というのも、ファリサイ派の人たちとの対立は、変わりないからです（六・一一、一一・五三他）。イエスをこの地から追い出そうとしている、領主ヘロデの名を出して追い出そうとしているのだ、という理解です。

これに対して、これはやはり善意から出たものだという理解があります。この言葉遣いですが、「ファリサイ派の人びとが何人か近寄って来て」というところは、端的に訳せば、「あるファリサイ派の人々が来て」です。つまり、イエスとの関係の悪くないファリサイ人もいて、ここに来たのは、そういう人たちだという受けとめ方です。私どもも、イエスを食事に招いたファリサイ人（一一・三七、一四・一他）を何人か知っていますし、後に、イエスをキリストと信じるようになったファリサイ人ニコデモというような人がいたことも知っています（ヨハネ三章）。

どちらかに決めることはできませんし、おそらく必要ありません。しかし、そのどちらにしても、「ここを立ち去ってください。ヘロデがあなたを殺そうとしています」という言葉には〈逃げる〉という響きがあったことです。それが、イエスのレスポンス（答え）から明らかです。「だが、わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない」。イエスは「だが」と言っています。〈しかし〉という意味もありますし、〈むしろ〉という意味もあります。たとえヘロデの刃（やいば）が迫っていても、ヘロデを避ける道を、私はとることはない。わたしは、自分の道を進まなければならないというのです。

2 進まねばならない

イエスは、自分の道を進む、進みたい、と言っているわけではありません。「進まねばならない」のです。

それは、神の御心に従うという意味です。自分の思い、こうしたい、こうしようということを言っているわけではありません。

このイエスを、先ほどのヘロデと、つまりファリサイ派の人が間接的に言及したヘロデと、比べて思い起こしていただきたいと思えます。ヘロデは、殺そうとしていると紹介されています。彼は、ほかのだれでもない、自分の思いに従っていいこうとしています。そしてそれと対照的に、イエスは、自らの意志ではなく、神の意志に従うというのです。

先週イエスが、ガリラヤを去ってエルサレムへと向かったのは、イエスのメシアとしての自覚の深まりによるものだったと申し上げました。「自覚」というのは、自分において、自分でない、自分を越えた方に相対（あいたい）している、それによって促されているということです。それゆえそれは、自分の思いに従うのではなくて神の御心に従うということです。

ですから、ファリサイ派の人が、イエスにどのようなアドバイスしようとも、ヘロデから逃げることが、仮に最善であるとしても、イエスはそのような道を取ることはいたしませんでした。「自分の道」、すなわち、神から与えられた道を歩むのです。

神に従うことです。神の救いに仕えること、メシアの道を歩むことです。この道にヘロデが関与することはできないのです。「三日目にすべてを終える」。メシアであるイエスがすべてを成就します。

メシア（キリスト）・イエスは、ヘロデの手にかかって殺されるのではないということです。言い換えれば、イエスはエルサレム以外の所で死ぬことはないのです。それゆえイエスはエルサレムへと進んで行きます。彼は、父なる神によって、御子に与えられた道を、進んで行くのです。

だが、わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない。預言者がエルサレム以外のもので死ぬことは、ありえないからだ。エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった（三三三b〜三四節）。

エルサレム、この町は、たんに一つの町ではありません。神に選ばれた町、神殿に神がいます町です。エルサレムは、信仰の中心であり、神の民イスラエル全体の象徴です。詩編にこう歌われています。

主の家に行こう、と人々が言ったとき、わたしはうれしかった。エルサレムよ、あなたの城門の中に、わたしたちの足は立っている。エルサレム、都として建てられた町。そこに、すべては結び合い、そこに、すべての部族、主の部族は上ってくる。主の御名に感謝を捧げるのはイスラエルの定め。そこにこそ、裁きの王座が、ダビデの家の王座が据えられている（一一二・二〜五）。

この「エルサレムの救い」（ルカ二・三八）をイスラエルの敬虔な人々はみな待ち望んでいたのです。それゆえこの場所こそ、イスラエルの民に向かって、すべての国民（くにたみ）に向かって、神の救いのメッセージが語られ、この場所こそ神の救いがなされなければならなかったのです。

ところが、そのエルサレムは、かつても、いまも、その中心を構成する宗教の指導者たち、それに率いられた人々によって、神の言葉は拒まれつづけてきました。神の言葉を伝えようとして、神から遣わされた預言者たちは、排斥され、殺されてきたのです（一一・五〇〜五二）。

先ほどの箇所「石で打ち殺す者よ」（三四節）という言葉がありました。ご承知のように、旧約聖書の掟には、神を冒瀆する者、偶像を礼拝する者について、石を打って殺すことが命じられていました。しかし、神に遣わされた預言者たちを殺してきたエルサレムこそ、石をもって、打ち殺されるべきものであったのです（使徒言行録七章を参照）。それゆえここで、イエスの口から、裁きの言葉が、おごそかに宣せられるほかなかったのです（三五節）。

3 集める

しかし、エルサレムに上るイエスを、ただ裁きのために上るのだと見る事ができないのは、言うまでもありません。

それは、先ほど読んだ三四節の言葉に隠れています。「めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか」。なるほど、神は、悔い改めのために、立ち返りのために、次々に預言者を送り、恵みと愛を伝えてきたのです。しかし、「応じようとしなかった」。ここでも、彼らは、自分の思い、意志、願いに生きようとしたのでした。神から生きようとしなかった、神に従うことをしなかったのです。

しかしそれでも神は「集めよう」となされた、なさっている、御子が送られたことはその証しです。そのように神は、イエスの十字架の死と復活によって、私どもの罪を贖うことによって、私どもを神の国へと、神の国の、恵みの食卓へと招き、集めてくださいます。そこに私どもの希望があります。

その神の「宴会」(一三・二九)の食卓には、アブラハムも、イサクも、そしてヤコブも、預言者たちもおります。私どもも、罪赦され、キリストの義をまとい、その交わりにあずかります。

新しい神の民を集めるため、イエスはエルサレムに上られます。神の救いを実現するメシアとして、エルサレムに上るのです。

今日の箇所、はじめに申し上げたように、特別のいやしがなされたり、教えが与えられたり、そうした箇所ではないようです。しかし私どもには、エルサレムに向かう、十字架を見すえてエルサレムに向かう御子イエスのところが明らかにされているように思えます。

人が、私どもが、それぞれの思いに従って生きようとしているとき、ヘロデがそうでしたし、エルサレムの人々がそうでしたが、しかし、それとは対照的に、イエスはひとり、メシアとして、神の御心に従って行ったのです。

ということは、この神の救いは、人の関与によってなつたのではないということでもあります。イスカリオテのユダも、イエスを裏切つて、御子を十字架へと引き渡したことにおいて役立ったというのではないのです。もしそう考えるなら、それは、とんでもなく、逆立ちした考えです。

そうではないのです。それは、ただ神の御心によつたことです。神の救いの恵みによつたことです。その御心に、御子イエスが、自らの歩むべき道を認め、従って行ったところで、その服従の道を、その死に至るまで従順に歩み通したところで、神の救いは成就したのです(フィリピ二・八)。

神に従うこのイエスの道、私どもに罪の赦しをえさせる十字架への道、それはただひとりイエスだけが歩むことのできる道でした。私ども人間の関与しうる歩みではありませんでした。

こうして罪の赦しを、私どもは、受けとるにも値しない者たちとして、過分な恵みとしていただくのです。しかも無償でいただくことができるのです。この救いの道をメシアとしてイエスはいま歩み通そうとしています。

(二月二七日)